

地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト
～農村青年層のための「ファーマーズ・スクール」



■プロジェクト概要

場 所：セネガル国ティエス州ンブール県ンゲニエヌ行政村



対象者：20代前後の農家（男女）約600名

内 容：セネガルは農業国でありながら、食料の半分を輸入に頼っています。そこには、自然環境と農業経営の両面での課題があります。主要輸出作物の落花生は、投資の割合も大きいため利幅も少なく、また、国内での農業技術・農家経営の指導がほとんどなされていません。従来の粗放な農法（畔を作らず直播栽培）に頼る稲作は結果として生産性が低く、事業対象となる行政村でも、米の購入費が家計を圧迫しています。農家の大多数は小規模家族経営ですが、商品作物にしる自給作物にしる、包括的に農業経営を捉えることができていません。また、年間降水量が600～800ミリとやや少ない上に、対象地域では灌漑設備も発達していないため、農業生産は文字通り雨頼みになっています。さらに、季節や生育環境を鑑みた作物の栽培組み合わせなど、土地の有効活用も見受けられず、家畜の糞などを使った土壌改良が計画的にされているとも言いがちなのが現状です。

結果として、収入を求めて農村の若者は都市やヨーロッパへと出稼ぎに向かいます。国家としても出稼ぎ防止のためのプログラムを実施しているものの、そこには「農村での収入がいくら向上すれば、出稼ぎに行かなくても済むのか」という視点が抜けてしまっているために、農業生産の改善策も芳しくありません。

しかし、事業対象の村の青年たちも「出稼ぎに行かずに、村に残って農業で生計を立てられるようになりたい」と切望しています。そこでムラのミライは、インドでの経験も活かしつつ、青年たちが「出稼ぎにいかなくても済む」ように、現地カウンターパート NGO「Intermondes（アンテルモンド）」と村の若者たちと共に、自然資源の回復と管理・農法改善・農業経営に取り組んでいくことにしました。

2016年4月に JICA 草の根技術協力事業（パートナー型）に採択されたため、契約締結となるまでの期間は、JICA とセネガル政府間の協議も含め、主に事業開始に向けての諸手続き・書類整備に注力することになります。また、和田／中田がセネガルに渡航し、Intermondes と必要な協議を適時行います。事業が開始すれば、まずは農業研修の場所となる「ファーマーズ・スクール」の整備に取り掛かり、また同時に、研修参加者を募った上で、村での資源状況を把握し、ステークホルダーの間で共通認識を持つためのリソースマップ作りに関する研修から活動を開始する予定です。